「ＮＰＯ」ワンポイント・アドバイス

～もっと良い会議をつくるコツ　その６　いち参加者ができること（後編）～

これまで会議を進行する立場からの「コツ」を紹介してきました。しかし、会議をつくるのは進行役だけの責任ではありません。いち参加者も、良い会議をつくるために効果的な役割を実践できます。

❹ 発言するとき、他の人を否定しながら言わない

人は、つい誰かを否定しながら発言してしまいます。例えば、「Ａさんの言ったやりかたではうまくいかないから、絶対こうしたほうがいい」などです。それを聞いたＡさんは素直に耳を傾けるのではなく、悔しがったりむきになって反論したりで、効果的な議論にはなりません。

「Ａさんの意見もよく分かるのですが、他にもこんな考え方もあると思います」と言ったうえで発言すると、Ａさんも含め他の参加者の発言も促すことができます。

ポイントは、自分の発言を絶対視しないこと。会議を、争いの場ではなく、つくりあげていく場としましょう。

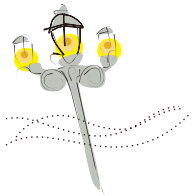
❺ ホワイトボードに書き始める

会議が膠着状態になってしまったら、勇気を出して立ち上がり、ホワイトボードに近寄り、イメージ図などを描いてみましょう。全員の視点がホワイトボードに集中し、他にも立ち上がる人が出て「ああした方が良い」等、議論が動き出します。このように会議中に人が立ち上がる人が出てくるのは、良い会議の兆候と言われています。

ホワイトボードが無ければ、手元のコピー用紙を活用するのも良いです。皆が指せるものをつくり、立ち上がるよう仕向けてみましょう。

❻ 要約発言をする

会議の途中で「ついてこれない参加者」が出てきたり中だるみしてきたら、「要約発言」が効果的です。会議のここまでの主な意見や提案、未解決の部分や今の段階を要約してみるのです。その場合、締めに「〇〇と思うのですが、それであってますか？」というように言い、本来の進行役の立場を傷つけないようにしましょう。的確な要約ができると、会議は再び動き出します。



相談希望の方は、まちセンへ

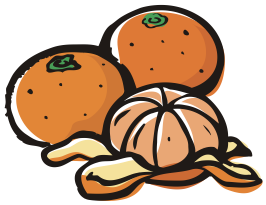
まちづくりセンターでは、もっと具体的な「良い会議のつくりかた」についての相談も受け付けています。お気軽にご相談ください。

参考資料：［ＩＩＨＯＥ］人と組織と地球のための国際研究所発行『ＮＰＯマネジメント』

センター長のつぶやき

丸藤 競

東日本大震災後、「ふれあい」や「絆」という言葉がよく使われるようになりました。しかし「ふれあい」や「絆」のある地域をつくるのはとても難しいことです。私も毎週のように釜石に通い仮設団地を拠点に支援活動をしていますが、そこの自治会長さんから、「住民同士が仲良しになれないでいる」という悩みを聞きました。同じ境遇の人たちが、毎日、同じ敷地内で暮らしているのにです。

私は、「ふれあい」や「絆」は誰かがつくってくれるものではなく、その地域に住んでいる人が自分からつくりあげていくものだと思います。私が行っている活動も、住民が自ら動き出していけるようになるための環境づくりです。自ら動きだしつくりあげていく中で地域での役割を見つけることができたら、「生きがい」を見出せます。「生きがい」を見つけることができれば、復興への歩みは確実なものになっていくと思います。

新しい年は、復興に向けて本格的に動き続けていかなくてはならない１年になります。私たちができることは、それぞれの地域や立場の中で自ら動き「生きがい」を見つけ、元気をだしていくことではないでしょうか。